

一つの伝記論 (10)

安 達 肆 郎

目 次	
序	
一	
二	
三	利用された伝記
四	好事家的伝記
五	文学的伝記
六	歴史的伝記
七	
八	自己目的・自足的伝記 (1)
九	自己目的・自足的伝記 (2)
十	
十一	
十二	伝記は本来人間精神からいかにして生れたか (「本来の伝記」の成立)
十三	
十四	伝記は人間にとって本来いかなる意味をもつか——
十五	
十六	人間にとって「伝記」は本来何なのか——……………本号

15

以上、「文化としての伝記」の正体 (「内容」「構成」「性格」の生きた姿)のうち、先ず、「内容」の生きた姿を復原したが、次に、「文化としての伝記」の「性格」の生きた姿の復原を試みよう。

さて、ここに「文化としての伝記」の「性格」とは、「文化としての伝記」が、——他種の文化と対比した場合——、人間に対してもつ独得の意義を指す。

前述の様に、「伝記」が、精神のある特定の立場ではたらきの所産として、独立した文化領域を形成する以上、「伝記」は、人間に対して、他の文化とは異なつた独得の意義をもつ筈。

ところが、従来、「文化としての伝記」の実態が忘れられるとともに、「伝記」がもっていた元の生きた独得の意義も忘れ去られている。それ故、「文化としての伝記」は如何なる文化であるかという先の問いに、よりの確に答えるために、「文化としての伝記」の独得の「意義」の元の生きた姿が復原されねばならぬ。(人々がそれを実感しうる様にせねばならぬ。)

さて、それを復原する手順であるが、それは、先の「内容」の復原の手順と同様、a. 先ず「文化としての伝記」がもつ「意義」の実態を確認し、b. 確認された実態(その特徴等)を踏まえて「意義」の生きた姿(正体)を、適当な譬(象徴)によって髣髴させればよい。

a. 先ず「文化としての伝記」の「意義」の「実態」であるが、「文化としての伝記」が人間に対してもつ意義は、総じていえば結局、「伝記者独得のころ」の所産である「本来の伝記(自己目的・自足的伝記)」が人間に対してもつ意義とその変種に他ならぬ。というのは、前述の様に、「伝記」という文化領域の内容の核心をなすのは「伝記者独得のころ」であり、それが生み出した「本来の伝記」は、「伝記」という文化領域の構成の中心であって、「文化としての伝記」の領域に属する他の伝記は、何れも、それを生んだころにおいても、また姿かたち(型)においても、「本来の伝記」の変種(型)であるから、人間に対して「本来の伝記」に類する意義を担う筈だからである。

畢竟、「文化としての伝記」の意義の実態は、「本来の伝記」がもつ意義の実態とその変種に他ならぬ。それ故、次に、先ず「本来の伝記」の意義の実態を省みよう。

「本来の伝記」は、人間(筆者、読者)に対してどの様な意義をもつてあるか――。

先述の様に、「本来の伝記」の筆者にとって、「伝記」を書くことは、主人公そのひととの「出逢い」を、自分に(ひいて他の人々にも)証しする(確認する)ことである(第十二章参照)。ロマン・ロランの口吻をまねていえば、

「伝記の主人公に対する人間的信仰を証しする」ことである。「伝記」そのものは、筆者の主人公に対する「人間的信仰の証し」である。第十二章参照。）

「伝記を書く」ことが、どうして、その様に「主人公に対する人間的信仰（出逢い）を証し（確認）する」ことになるのであろうか——。

先述（第十二章）の様に、「本来の伝記」の場合「伝記を書く」ことは、結局は、筆者が全人をあげて（ひととなつて）、傾倒する主人公そのひとの生涯の生き方を辿り、終に、その生き方を生きる主人公そのひとといわば再逢し、これによって、主人公そのひとを、自己のうちに担うことを自らに確認することであるからである。（第十二、第十三章参照。）

この様なこととして、「伝記を書くこと」は、「本来の伝記」の筆者にとっては、直接に、彼自身のひととしての在り方、生き方（彼の一度切りの且つ独自の生涯を生きる、その生き方）に関わる重い意義をもつに違いない。「伝記を書く」ことは、「本来の伝記」の場合、筆者にとって容易ならざるわざである。（第十二、十三章参照。）

（「伝記」が筆者自身に対してもつ、この様な独得の重い意義や、「伝記を書くこと」が筆者にとって容易ならざるわざであることに関して、われわれは、⁽⁵⁾⁽⁶⁾「本来の伝記」の筆者から、いろいろな告白をきくことができる。）

「本来の伝記」の読者は、先に（第十四章）みた様に、「本来の伝記」を縁として（「伝記」を読んで、そこに込められた、筆者の主人公に対する感銘を同感し、それを一つの縁として、また、「伝記」に述べられた主人公の生涯の生き方を辿って、その生き方に感銘し、それをもう一つの縁として）、主人公そのひとへの共感（人間的信仰）へ至る幸運にめぐまれることもあるのである。（第十四章参照。）そして、その様な幸運にめぐまれた場合には、読者は、先述した筆者の場合と同様に、主人公そのひとを、自分が生きることの支えとも友ともすることになるのである（『ペートーヴェンの生涯』pp. 17-18）。

結局、読者にとっても、「本来の伝記」は、彼自身の生き方との直接で重いかかわりを秘めた存在である。それ故、心ある読者にとっては、「本来の伝記」を読むことは、心安からざるわざである。⁽⁷⁾

右述の様な、「本来の伝記」の、その筆者、読者にとっての意義は、これを、人々に対する他種の文化の意義と対比すると、独得の意義といわねばならぬ。

a. 何よりも、「伝記(「本来の伝記」)」の意義は、直接、人の生き方にかかわる。その様なものとして、それは人々(筆者、読者)が、前述の様に、その全人(ひと)を以て始めて受けとめうる底の意義である。人が自分の一側面(例えば、理性、感情、判断力等)を以て受けとめうる底の意義ではない。それらとは異質の意義である。⁽⁸⁾

(「本来の伝記」を読んでも、読者がそこに、ただ文学的価値や史料的価値しか認めないこともありうるが、——むしろ、それが普通であるが——これは、読者の心が弛んでいて、「本来の伝記」の「本来の意義」から析出した、いわば、「独得の意義」の残滓しか感得しえないからである。第十四章参照)

b. 「本来の伝記」の意義は、その内容の性格からいえば、筆者、読者の実存(一度切りの、固有の生涯を生きるひと)にとっての意義である。

それは、筆者、読者が、その一度切りの生涯をいかに生きるか、その実存的な生き方に直接かかわる意義である。この点で、「本来の伝記」の意義は、一般的な所謂「価値」や一般的な意義とは異質であって、「価値」や一般的な意義へ還元することはできない。

(だから、「本来の伝記」の意義は、人の生き方にかかわるといっても、実存的な生き方とかかわりのない、表面的、一般的な生きざまにかかわる価値や意義<例えば、処世訓や処世術に類する意義、効用>と同一視されてはならない。)

16

「文化としての伝記」の意義は、ただ「本来の伝記」がもつ意義に止まらぬ。「文化としての伝記」の領域に属する「本来の伝記」の変種(型)(「中間的性格の伝記」「各種の伝記」)は、それぞれ、「本来の伝記」とは異なった意義をもつ。

尤も、それらの意義は、何れも「本来の伝記」の意義の同類である。というのは、「本来の伝記」の意義は、その原動力となった「伝記者独得のところ」

(主人公に対する人間的信仰)に基づくが、「本来の伝記」の変種(型)のうちには同じころの血の同類(変種)が流れているからである。具体的にいうと、「本来の伝記」の変種(型)は、何れも、「本来の伝記」の原動力となった「出逢い経験」の同類(変種)を原動力のうちに秘めているからである。(先述)

とはいえ、その秘め方も、秘める「出逢い経験の変種」も一様ではない(前述)、そこで、「中間的性格の伝記」「各種の伝記」の意義は、「本来の伝記」の意義と異なるのは勿論、それぞれに異なることとなる。

先ず、「中間的性格の伝記」の原動力となった、筆者の主人公に対する尊敬、讚嘆、敬慕、思慕等の思いは、先述した主人公に対する「人間的信仰」(傾倒)の変種の一つといえよう。(7、14節参照。)

識者の中には、特にこの点に着目して、伝記の中で主人公をせせら笑う伝記の筆者を非難して、主人公に対する筆者の「尊敬」の念こそ「真の伝記」の原動力の一種であるという人さえある。⁽⁹⁾

然し、主人公に対する尊敬、讚嘆、敬慕、思慕等の思いは、「本来の伝記」の筆者のころの変種であることを忘れてはならぬ。いかにも、「尊敬」等のころは、筆者の全人をあげての思いである。この際、筆者が「伝記」を書くのは、ただ、この「全人をあげての思い」を自分にも、他の人々にも証しするためである。表向きは、その他に、彼が「伝記」を書く目的や狙いがあるわけではない。そして、この際の「伝記(中間的性格の伝記)」そのものは、筆者の「主人公に対する全人をあげての思い」の証しに他ならぬ。

とはいえ、この際の筆者のころは、「本来の伝記」の筆者のころとは異なる。同じく「全人をあげての思い」といっても、前者と後者とでは、いわば、「全人のあげかた」が異なる(「傾倒」と「尊敬」といえようか——。(「出逢い」によるころの緊張が弛んで、主人公に対する「人間的信仰<主人公そのひとを自己存在の根底に担う>」が変質したのが「尊敬」等の心情<主人公そのひとを自己存在の彼方に仰ぐ>)なのである。<7節参照。>)

従ってまた、同じく「全人をあげての思い」の証しといっても、この際の「伝記」の人々(筆者、読者)にとっての意義は、その深さにおいて、「本来の

伝記」の人々に対する意義とは異なる。(第十四章 5～9 節参照。)

それに、この際の筆者の心情は、「本来の伝記」の筆者の心情の様に純粹ではない。この際、筆者のころには、秘かに、例えば、「思慕する」主人公の思い出のよすが(縁)をえたいとか、「敬慕する」主人公のモニュメントを残したいとかいう風な目的や狙い等々の思わくが入り込んでいる。

結局、この際の筆者のころは、「主人公そのひとに対する人間的信仰」に比すると、「緊張」を欠き、「全人のあげかた」が異なり不純である。⁽¹⁰⁾

然し、「中間的性格の伝記」を書く筆者のころは、先述(8節のc)の様に根源的には「本来の伝記」の筆者のころと同類であり、しかも、そのころは、先述(8節のc)の様に、依然、直接主人公そのひとに対する「全人をあげての思い」である。そして、それが、筆者が伝記を書く際の原動力である。侵入した「思わく」に征服されて、筆者のころがその様な元の姿と地位を失ったわけではない。(8節のd及び13節参照。)⁽¹¹⁾「中間的性格の伝記」そのものは、筆者のこの様なころの証しである。

かかるものとして、「中間的性格の伝記」が、そのの筆者、読者の実存的在り方、生き方と直接深いかかわりをもち、彼等に対して、一般的な価値や意義に還元しえない独得の意義(「本来の伝記」がもつ意義に類する意義)をもつのは自然である。また、この種の伝記の中に、時に、筆者が、それを書いて、彼のころの緊張が昂まるにつれて、彼のころが昇華され、終に、彼が書いたその伝記が、筆者にとっても読者にとっても「本来の伝記」のそれにちかい意義をもつに至る場合があることも納得される。

(例えば、「思い出」は、通常、主人公をなつかしむころ<思慕>から書かれるが、「思い出」の中には、それを書くほどに、筆者のころの緊張が昂まり、それにつれて、主人公をなつかしむ筆者の心が昇華されて、主人公そのひとへの傾倒<「人間的信仰」>に至り、ひいては、これを読む人々にも主人公そのひとを共感せしめる縁を含むに至る底の「思い出」もある。<小論第四章、註9参照、前出拙稿「伝記者のころ」第四章3節及び第5章参照。>)

では次に、「本来の伝記」のもう一つの変種(型)である「各種の伝記」は、筆者、読者に対して如何なる意義をもつか——。

「各種の伝記」の場合、先述(7節、12節参照)の様に、筆者が伝記を書く直接の原動力は、もはや主人公そのひとへの傾倒ではない。筆者のころの成り立ち(素性)からいうと、そこでは、「傾倒」が既に原動力たる地位を失って、それに替って種々の思わく(「目的」「狙い」「好み」)が直接の原動力たる地位を占めている。

然し、先述の様に、その際「出逢い経験(傾倒のころ)」は、消滅したのではなくて、筆者の心中に底流として生きつづけている。そこで筆者は、主人公に対して、「目的」「狙い」「好み」等を介しての間接の関心の他に、主人公そのひとに対する直接の関心をももちつづけることとなる。(7節、12節参照)

そのために、「各種の伝記」は、筆者に対して——右述した筆者の思わく(「目的」「狙い」等)とのかかわりによる、いわば表向きの意義とは別に——また、「伝記」として、独得の意義をもつこととなる。

「各種の伝記」を書く際に、筆者が、「伝記」を書いていることを意識すればするほど、彼の心中に底流していた主人公そのひとに対する直接の関心が甦り、それが彼の心に、彼の在り方、生き方に直接かかわる底の衝撃を与えるに至るに違いない。筆者はそれを、いわば(象徴的にいえば)ころを刺す「刺の痛み」として感得する。(17節参照⁽¹¹⁾)

第十五章であげた、「各種の伝記」の筆者、読者が実際に感得する所謂「刺」の成り立ちを、右の様に解してよければ、その「刺の痛み」こそ、「本来の伝記」の変種(型)の一つとしての「各種の伝記」が、その筆者に対してもつ独得の意義である。(17節参照)

「各種の伝記」の中、その性格上、「刺」とは最も縁遠いと思われる「好事家的伝記」においてさえ、筆者はやはり「刺の痛み」を感得する。

先述した「諸国崎人伝」の筆者は、書中、屢々、主人公の在り方、生き方を「買う」とか「買わない」とかいつて、その様な「在り方」「生き方」、ひいて

主人公そのひとに対する感銘を表わしている（第三章及び第十六章6節の2参照）。これは、筆者にとって「好事家的伝記」を書くことが、ただ気楽に書き流せる底のわざではなくて、伝中のどこかで、主人公の在り方、生き方と、結局、主人公そのひと（全人）と、おのれの全人を以て対決（峙）せざるをえない底のわざであることを示しているのである。

この様な「(対決 (峙))」が、筆者自身の生き方に関して、彼のこころを刺す鋭い「刺」を蔵していることはいうまでもない。畢竟、「好事家的伝記」の筆者においても、それを書くことは、心安からざるわざであり、心を刺す「刺」⁽¹¹⁾⁽¹²⁾を含んだわざなのである。

「各種の伝記」は、読者に対しても同様の「刺」を秘めている。

例えば、われわれは先に（第十五章）、現行の「歴史的伝記」がかたくるしいとして余り読まれないで、それに替って、近時、気楽に読める「物語り風人物史」が現れ、それがベストセラーになっていることを注意したが、「かたくるしい（堅苦しい）」という読者の感じの中には、「歴史的伝記」が「伝記」の一種として含む「刺」の感じも含まれているに違いない。

また、右の様な風潮と反対に、近時ドイツでは、「伝記」の内容がおざなりになって、主人公そのひとに迫る真剣さを失い、ひいて読者に対しても迫力を失っているのを嘆き、かかる所謂伝記に対して、敢えて「反伝記」という名で、主人公の生き方を介して主人公そのひとに迫ろうとする伝記（ヒルデスハイマー、『モーツァルト』）が現われ、それがベストセラーになっている、という。（第十五章参照。）

この事実は、従来の伝記が、主人公の生き方を記して、主人公そのひとに迫り、それだけ読者の心を刺すものであったのに、現代の伝記が、その「刺」を失って来ていることに、今日の人々（筆者も読者も）が気づき、失望していることを示すものである（第十五章参照）。

「各種の伝記」が含む、筆者、読者のこころに対する上述の様な「刺」は、かたちや度合いは異なるが前述したその成り立ち、性格からみて、みな、先

述した「本来の伝記」がその筆者、読者のところに対してもつ独得の「意義」の変種⁽¹³⁾といてよいであろう。

以上、その実態を別々に考察してきた、人々（筆者・読者）に対して「本来の伝記」がもつ「意義」と、「中間的性格の伝記」がもつ「意義」と、「各種の伝記」がもつ「意義」とは、その程度、かたちにおいてはみな異なるが、基本的性格（——筆者、読者の実存としての在り方、生き方に直接かかわり、筆者、読者が全人を以て受けとめる他はないという基本的性格——）においては、三者は、同類で、後の二者は、「本来の伝記」がもつ「意義」の変種と解することができる。

畢竟、「文化としての伝記」は、総じて人間（筆者、読者）にとって、彼の実存としての在り方、生き方に直接かかわる、従って実存としての彼が全人をもって受けとめる他ない独得の特異な意義とその変種をもつのである。

以上、「文化としての伝記」が人間の在り方、生き方に直接かかわる「刺」という特異な意義をもつことを確かめたが、「伝記」が人間の歴史の中で他種の文化の中へ解消、吸収されることなく、「伝記」として永く広く生きつづけることが出来たのは、恐らくは、それがこの様な独得の（特異な）意義を持つ所為である⁽¹⁴⁾。

そのことを、よく示しているのが、人間の歴史における「各種の伝記」の運命である。

「各種の伝記」は、先述の様に<13節「構成」参照>、一面では各種の文化の一ジャンルに違いないが、しかも、人間の歴史の中で、決して単なる各種の文化の一ジャンルに成り果てず、依然「伝記」の一種として生き残って来ている⁽¹⁵⁾。<4節、13節参照。>

「各種の伝記」がこの様に、他種の文化（例えば文学）の単なる一ジャンルに成り果てず（その内へ解消、吸収されることなく）、「伝記」として生き残ることができたのは、いろいろの兆候からみて、それが、前述の様に人々に対し

て、単に文化の一ジャンルとしての意義に止らず、他の種の文化と異なって(他種の文化にはない)直接に人々の在り方、生き方にかかわる特異な意義(「刺」)をもっていたからに違いない。

畢竟、前述の様な、直接に人の在り方、生き方にかかわる「伝記」の「意義」は、「文化としての伝記」⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾ 独得の特異な意義にして、その様な「意義」をもつことが、「文化としての伝記」の存在理由である。

17

以上、「文化としての伝記」の性格(意義)の実態(存在と特徴)を省みたが、次に、この様な「実態」に肉付けし血を通わせて、性格(意義)の正体(生きた姿)を復原せねばならぬ。正体(生きた姿)を復原して、人々がそれを実感しうる様にして始めて、「文化としての伝記」の性格を解明したといえるからである。(12節参照)

復原に先きだって、前述した「性格(意義)」の実態の要点をとりまとめると、

1. 「本来の伝記」「中間的性格の伝記」「各種の伝記」という三様の伝記の性格(意義)は、基本的には同類で、共通して次の様な特徴をもつ。a. 人間(筆者、読者)が全人(ひと)を以て受け止める他ない底の意義である。b. 深く、ひと(実存)の心底に達する底の意義である。c. ひとの存り方、生き方に直接かかわる意義である。

2. 然し、三様の伝記の性格(意義)は、具体的には、程度、かたちにおいてみな異なり、「中間的性格の伝記」「各種の伝記」がもつ意義は、「本来の伝記」がもつ意義の変種と解することができる。

さて、「性格(意義)」の正体(生きた姿)の復原の要諦は、「文化としての伝記」が、人々(筆者、読者)のひと(全人)に対してもつ意義を、具体的な(形、姿を具え、直観し感覚しうる)ものごとが人々に対してもつ具体的な意義に準え、その「具体的な意義」の生きた姿(諸相)によって、「文化としての伝記」の意義の生きた姿を象徴的に髣髴させるにある。

それで先ず、前述の様な特徴をもった「文化としての伝記」がひとに対してもつ意義を何に準えるかであるが、私はそれを、身体の急所に刺さった「刺」が人の身体に与える痛みを準えることができると思う。「身体」とその急所を刺す「刺」との関係は、「伝記」の筆者、読者の「ひと」と、「ひと」を直接に、その心底まで突き刺す「伝記」との関係に、形式的には相似し、従って先の関係から生じた結果は、後の関係から生じた結果と形式上相似するからである。

以下、身体の急所に刺さった「刺の痛み」の生きた諸相によって、「文化としての伝記」の意義の生きた姿を象徴的に復原する。

1. 「刺」が身体の急所に刺さると、その「痛み」は、身体の一部によってでなく全身を以て受け止める他ない底の痛みである。

(「身体」は、筆者、読者のひと<全人>を、「急所に刺さった刺」は、ひとを、直接その生きる根源<こころ>まで突き刺す痛烈な伝記体験を象徴する。「全身を以て受け止める他ない底の痛み」は、ひとの一面によってでなく、全人を以て受け止める他ない底の「伝記」の意義を象徴する。)

2. 急所に刺さった「刺の痛み」は、身体の表面に止まらず、深く全身の中核に及び、直接に身体全体の在り方、動き、働らきに影響する。

(これは、「伝記」が直接に「ひと」の生きる根源に達する底の意義をもち、ひとの在り方、生き方に直接かかわる意義をもつことを象徴する。)

3. 身体に刺さった「刺の痛み」は、基本的には上述の様な性格をもつ。然し「痛み」は、条件の変化によって変質、変容する。

a. 身体の急所に、他の刺戟が与えられると、そこに生じた感覚にまぎれて、「刺の痛み」は変質する。

(このことは、伝記の筆者のこころの緊張が弛み、原動力のなかへ各種の思わくが侵入すると筆者のこころが不純化し、伝記を書く<主人公の生き方を迎って、終に主人公そのひとに再逢する>際に、主人公との再逢から受ける痛切な意義<痛み>が変質することを象徴する。「変質した痛み」は、「中間的性格の伝記」の性格<意義>を象徴する。)

b. 身体の急所に与えられた他の刺戟が強烈で、それが与える感覚が、「刺」が与える痛みにとって替って、身体全体の在り方、動き、働らきを支配する地位を占めることがある。

尤も、この際、「刺の痛み」は消滅したのではなくて、新しい別の感覚の下に潜んだのである。そして、それは、新しい感覚の合間に、新しい感覚とは異質の、全身に及ぶ痛みを与える。

(このことは、伝記の筆者の心の緊張が更に弛むと、心に侵入した「各種の思わく」が力をえて、それが筆者に対してもつ意義<各種の文化的意義>が、主人公との出逢がもつ伝記本来の意義がもつ地位にとって替るが、然し、伝記本来の意義は消滅せず、生き残っていて、筆者、読者のところに、依然重い独自の意義として感得されることを象徴する。消滅せず、新しい感覚の下に潜んだ「刺の痛み」は、「各種の伝記」の性格<意義>を象徴する。)

以上、「文化としての伝記」の「性格(意義)」の正体を復原したが、これで「文化としての伝記」の正体(内容、構成、性格の生きた姿)の復原を終る。

「正体」の復原作業の完了によって、われわれがこの章で試みた「文化としての伝記」の「素性」の解明と「正体」の解明という作業も完了した。「正体」は、これによって、人々がそれを実感し得る底のものとなったからである。

右の二つの作業はこの章の冒頭に述べた様に、『文化としての伝記』は、如何なる文化であるかとの問いに的確に答える為になされた作業であるから、二つの作業の完了によって、この第十六章の課題であった右の「問い」への答えが一応完了したことになる。

然し、「文化としての伝記は如何なる文化であるか」との問いは、実は、小論で追究してきた「伝記に関する基本的問い」の第三、即ち、「人間にとって『伝記』は本来何なのか——」という問いを具体化したものであったことが想起されねばならない。(第十六章 1 節参照。)

「伝記」の素性と正体を解明(確認、復原)することによって、われわれは

今や「人間にとって『伝記』は本来何なのか——」という第三の問いにも答えたのである。

顧みると、小論はこれで、「伝記に関する三つの基本的問い」の凡てに答えたことになる。即ち、次の三つの問いに答えたことになる。

1. 『『伝記』は本来、人間精神からいかにして（どの様なところから、どの様にして）生れたか——』（第十二章）
2. 『『伝記』は人間にとって本来如何なる意味をもつか——』（第十四章）
3. 「人間にとって『伝記』は本来何なのか——」（第十六章）

また、これによって、先ず「本来の伝記」の実例を発掘し、それを核心とする「文化としての伝記」の実態を発掘確認し、それらの発掘した諸結果を踏まえて「伝記に関する三つの基本的問い」に順次答える、という小論の全体計画も一応完了したことになる。

それで、終りに、章を改めて、

- a. 行きつ戻りつした小論の探究の道筋をはっきりさせるために、小論で行った探究の大筋を振り返り、
- b. 探究した内容からみた場合の小論の性格を省み、
- c. 小論が「一つの伝記論」として、従来の伝記論と如何なる関係にあるかを省みて、小論の結びとする。

——未完——

註

十六

(1) ここにあげた様に、「伝記者独得のころ（「本来の伝記」の筆者のころ）」が、変質、変容の可能性を含むと考えることは、「伝記」に関する、人々の従来の考え方の変革を意味する。

従来、人々は、「本来の伝記（変質、変容以前のものと伝記）」の存在を全く問題としなかった。ということは、つまり、人々は従来「伝記者」のころは不変で、変質、変容しないと考えていたのである。（これに対して小論は、第一章以来、「伝記者のころ」は変質、変容するものと解し、その考えに基づいて、変質、変容以前の、もとの〈本来の〉伝記や伝記者本来の〈もとの〉ころを問

題として来たのである。)

- (2) カント (I. Kant) によれば、この様な発想 (「思考法の変革 <die Umänderung der Denkart>」) によって、よりよい成果がえられないか、との発想) は、「コペルニクスの最初の思想 (der ersten Gedanken des Kopernikus) と似ている。

「彼 (Kopernikus) は、星の全群が観察者の周囲を転回すると仮定したとき、天体運動の説明をすることができなかつたので、観察者を転回させ、これに反して星を静止させることによって、よりよき成功がえられないであろうかと試みてみたのである。」 (K.d.r.V. BXVI)

- (3) I. Kant の所謂「コペルニクスの転回」は、註(2)に示した「思考法の変革」のみならず、それを「仮説」として「事実に投げ入れて検証する」方法を意味する。(前出、高坂正顕、『カント解釈の問題』第一章「実験的方法としての超越的方法」一、三節参照)。

- (4) 従来、人々は、屢々所謂「各種の伝記」のこの様に複雑な成り立ち (来歴) を誤解或は無視してきた。先の譬でいえば、上に重なっている他種の文化の波 (例えば、文学、歴史等の波) のみを認め、その下に伝記の波 (変容した波) が潜んでいることを見落としてきた。そのため「各種の伝記」、例えば「文学的伝記」を単に「文学の一ジャンル」とのみ解し、それが同時に伝記の第三の型 (「本来の伝記」の変種 <型> の一つ) であることを看過した。

然し、人々が看過したのはこれだけではない。伝記の第二の型 (所謂「中間的性格の伝記」 <各種の「思い出」、「モニュメンタルな年代記」等>) を、今日の人々はそもそも「伝記」として認知していない。

そればかりではない。人々は、そもそも「伝記」の元の型 (「本来の伝記」) の存在を無視或は看過してきた。

ひとのひとへの「傾倒」の実例は稀である。だから、それを原動力とする「本来の伝記」の実例は、極めて稀にしか現われない。そこで、人々は、伝記の元の型に気がつかないか或はこれを無視する (これを例外とし、正面から問題とはしない)。人々が、「伝記」という文化の独立性を見失った最大の原因は、この看過或は無視である。

結局、人々は従来、「伝記」の三つの型を見誤るか、看過するか無視してきたのである。

この様な状況の下では、それらがいよって独立した伝記という一つの文化領域を形成することなど認められる筈がない。認めないで、従来、人々は、「伝記」というものは、すべて、また根っ子から他の文化領域に属するものとし、「伝記」をただ種々の文化の一ジャンルとみなしてきた。

この様な「伝記」本来の姿の「看過」が軽率であり、「無視」や「みなし」が不当であることは、小論で行った「伝記」の素性の「発掘」結果から明らかである。

- (5) 「本来の伝記」の実例の一つ『ベートーヴェンの生涯』の筆者ロマン・ロランは、その序(1927年3月の序)で次の様にいう。

「雨しげき4月の灰いろの日々に、霧に包まれたラインの川岸で、ただベートーヴェンとだけ心の中で語り合い、彼に自分の思いを告白し、彼の悲しみと、彼の雄々しさと、彼の悩みと彼の歓喜とによって全く心を浸され、ひざまずいている心は、彼の強い手によって再び立ちあがらされた。……それ故、私の心は鼓舞されて、生との新しい貸借契約に私は署名し、癒やされて再び立ちあがる者の神への感謝の歌をうたいながらパリへの帰途についたのであった。その「感謝の歌(Dankgesang)」がこの『ベートーヴェンの生涯』なのである」。(前出『ベートーヴェンの生涯』11-12頁。)

- (6) 他の機会に、私は、クセノポン(Xenophon)の『アゲシラオス(Agesilaus)』伝を、「本来の伝記」のもう一つの実例として取りあげ、それを分析したが(前出拙稿「伝記者のこころ」第二章)、その『アゲシラオス』伝の冒頭、筆者クセノポンは次の様にいう。

「私は、アゲシラオスの徳と栄光とに相応しい讃辞(appreciation)を書くことが如何に困難であるかをよく承知している。にも拘らず、それを書く試みがなされねばならぬ。……万が一にも如何なる讃辞も受けないという様なことがあれば、それはおかしいことだ(It would not be seemly)」(Xenophon VII. "Scripta Minora", Loeb Classical Library. p. 61)。右の文中、「……この試みはなされねばならぬ」というのは、前後の関係からみて、「自分が書かねばならぬ」といっているのである。

総じて、ここのクセノポンの言葉は、一般論を述べているのでなく、「アゲシラオスの伝記(讃辞)を書くのは難しい」と尻ごみする自分に強く言いきかせている言葉ととれる。ここの文章からは、自己自身を説得しようとするクセノポンの強い語気、気迫が感じとれる。(前出拙稿「伝記作者クセノポンの経験」I. <p.p. 54~56>参照。)

- (7) ロマン・ロランは、彼の『ベートーヴェンの生涯』が、多くの若人たち、殊に、この本が世に出た当時、「自己の理想精神が抑圧されているのを感じていた一世代」の人々に迎えられ、彼等はこの伝記に、彼等の精神を解放する言葉を求めてきたこと、また、この伝記が、幸運にも、彼等の生きる際の伴侶となり、支えとなったことを、「序」(1927年の序文)に記している。
- (8) この様に、「全人を以て始めて受け止めうる」という点では、「伝記」が人々に対してもつ「意義」は、宗教的意義に類するといえようか――。

ロマン・ロランが、『ベートーヴェンの生涯』の「序」(1903年の序)の終りに、「彼(ベートーヴェン)の実例によって、人生と人間とに対する人間の信仰をわれわれ自身の内部に改めて生気づけようではないか――」と語るのは、彼が、『ベートーヴェンの生涯』を書くことに、信仰者が「福音書」を書く或は読

む(キリストの生涯を辿る)ことに類する意義を感得していたことを示すものであろう。

(ロマン・ロランの年来の友アンドレ・シュアレスは、「福音書を書く様な態度でベートーヴェンについて書く権利を、私はロマン・ロランにだけ認容する。何故なら、彼は実際その精神で生きているのだから」という。<『ベートーヴェンの生涯』193~194頁>。)

- (9) 第十三章で引用したケーギ(W. Kaegi)の文中、「伝記ものに練達のジョンソン博士(Samuel Johnson)」は次の様に語っている。

「真の伝記は、読者を啓発し鼓舞し、慰めるべきである」。また、「単に一時的でなく永続的な影響力を持つ人物、また、著者と読者が基本的に尊敬の念を抱きうる人物についてのみ」真の伝記が書かれるのである、と。(小論第十三章1節。)(右のジョンソン博士の言葉は、Harold Nicolson, “Die Kunst der Biographie und andere Essays” 1958. に引用されている。)

- (10) ロマン・ロランは、単なる勝利者としての所謂偉人と、魂の弱さも悲しみも苦悩も具えた偉大な人々(「卓越せる人々」<Les hommes illustres>)とを区別する。(ロマン・ロラン『ミケランジェロの生涯』pp. 3~4、「ベートーヴェンの生涯」pp. 16~17。)

「本来の伝記」の原動力となった筆者の主人公そのひとへの傾倒は、この様な「卓越せる人々」との出逢いから生じる。(小論第八、九、十二章参照。)

「出逢い(傾倒)」は、主人公そのひとへの、筆者の全人をあげての共感であり、主人公そのひとを自己存在の根底に担うことである<小論第十二章>。「傾倒」が、「人間に対する人間的信仰」と呼ばれる所以である。

これに対して、「中間的性格の伝記」の原動力となった主人公に対する筆者の「尊敬」等々は、それが含む来歴を無視していえば、主人公の魂の弱さ等々から眼をそらした、単なる勝利者への讃仰に類する。

然し、「中間的性格の伝記」の筆者のこころは、実は、単純な尊敬、勝利者の単純な讃美等々ではない。それは、その成り立ち(来歴)からいえば、もと「本来の伝記」の筆者のこころ(傾倒)が変質したもの、即ち「傾倒」の変種である。そこには、「本来の伝記」の筆者と同じ「伝記者」の血が流れている。単純な勝利者の讃美等々になる筈がない。

それに、「中間的性格の伝記」の筆者のこころは、「変種」といっても、未だ変容(筆者の基本的立場の変更)には至っていない(前述)。それ故、それはなお基本的には(立場においては)「傾倒のこころ」と同類である。後述の様なそれの実態がそのことをよく示している。

とはいえ、それは、とにかく変質しているから、そこには、主人公の、人間としての魂の弱さや苦悩から眼をそらし、ただ勝利者としての彼を仰ぐ底の所謂「臆病な理想主義」(ロマン・ロラン『ミケランジェロの生涯』p. 4)が含まれて

いることは否めない。「主人公を自己存在の彼方に仰ぐ」のが、「中間的性格の伝記」の筆者のころのメルクマールになる所以である。

- (11) 「主人公そのひとに対する直接の関心をもちつづける」といっても、「各種の伝記」の筆者がもつのは、主人公との出逢いによるころの緊張が更に弛んだ場合の関心であるから、その「関心」は、主人公を自己存在の根底に担うとか、自己存在の彼方に仰ぐまでには到らず、ただ主人公そのひとと、己れの全人を以て対峙する底の関心である。

「各種の伝記」の筆者が、「伝記」を書いていることを意識すると、種々の視点から筆者が捉えた主人公の、いわば影の底から、筆者のその視点をのり超えて、様々の生き方を生きた生の主人公そのひとが筆者の全人に対して立ち現われる。「各種の伝記」の筆者が時に感得せざるをえない主人公そのひととの対峙の感はこの様にして生じるのであろう。その際、筆者が免れえない「刺」の感は、この様にして立ち現われた主人公そのひとの筆者そのひと（全人）に対する呼び声であらうか——。

しかも、そこから生じる主人公そのひとへの「直接の関心」は、もと主人公に対する「人間的信仰」の変種であるから、その「刺」の感は、具体的には、やはり筆者そのひとの生き方にかかわる底の「刺の痛み」を伴うに違いない。

- (12) 小論第五章で分析した『マリー・アントワネット』の筆者ステファン・ツヴァイク (Stefan Zweig) は、生涯の苦しみを通じて、最後に、自分の魂のうちに、祖先から受けついだ偉大を実現した主人公マリー・アントワネットに対して尊敬の念（或は対峙の感）を抱き、できることなら、「偉大たるべく、内からでなく外から強制されたために」苦悩しなければならなかった、そして、それを独りで耐え忍ばねばならなかった彼女のその苦悩を、芸術作品に変えて、せめて彼女の魂に聖なる救いを齎らしたい、と希っている。（小論第五章 1節）

ツヴァイクのこの様な「希い」は、ここにいう「刺」に刺された心のいたみの裏返しであらうか——。

- (13) 「各種の伝記」と、「各種の伝記に似て非なるもの」（例えば、ストーン <I. Stone> 流の伝記小説、物語り風人物史、等々）とを見分ける一つの目印は、それが、筆者、読者にとって心を刺す「刺」を含むか否かである、といえよう。また、「伝記」でも「刺」をもたない、また、「刺」を失いつつた場合、その所謂伝記は、もはや「本来の伝記」の筆者のころとの血のつながりをもたないから、「文化としての伝記」の領域の外へ出てしまうといえよう。

- (14) どの様な文化でも間接に又は副次的には、人の在り方、生き方とかかわりをもつてあろうが、「文化としての伝記」は、直接に且つ主として人の生涯の在り方、生き方にかかわる「意義」をもつ。

- (15) 「文化としての伝記」の「構成」の項で注意した様に、「各種の伝記」は、「伝記」の領域に属すると同時に、各種の文化（例えば、文学、歴史等）の領域に属

する。従って、「各種の伝記」は、「伝記」として「刺」を含むと同時に、それぞれ各種の文化特有の意義をもつことはいうまでもない。つまり「各種の伝記」は、それが人々に対してもつ意義に関しても二重性格をもつ。

- (16) 「文化としての伝記」のこの様な「独得の特異な意義」は、これを図式化していえば、次の様になるうか——。

「伝記」は、「本来の伝記」でも、これを単なる作品としてみると、様々の意義(価値)をもつが、「伝記」独得の意義は、右述した単なる作品としての伝記がもつ様々の意義を、「伝記」の原動力たる「出逢い経験」の強い衝撃によって凝集し溶解し、これに命を与えた底のものである。(第十四章3、4節参照)

逆にいえば、単なる作品としての伝記がもつ種々の意義(価値)は、「伝記」独得の意義の命がうすれ、強い衝撃によって生じたところの緊張が弛み、そのために、独得の意義が冷却して、析出した底のものである(7節参照)。

- (17) 所謂伝記が気楽に書きなぐられ、読み流される今日、「刺」を含むことが「伝記」の存在理由であるなどというのは、時代錯誤だといわれるかも知れぬが、気楽に書きなぐられ、読み流される底の所謂伝記が、果して、歴史において「伝記」として生き残ることができるだろうか——。

- (18) 第一章2節で述べた様に、また、第十七章2節で触れる様に、私の伝記研究は、もと、哲学的人間学的見地から、「伝記」に含まれた人間関係の根源性(全人的で緊密な性格)に関心をもったのがきっかけで始まった。(そのことと、出来上った私の伝記論が文化哲学の一隅として、いかなる意義をもつかは、全くかわりのない別問題である。)

それ故、私の計画(むしろ希い)では、この「一つの伝記論」には、次の様な内容の研究がつづく筈であった。

1. 「一つの伝記論」で解明された、「伝記」に含まれた独得の人間関係を省み、
2. その「独得の人間関係」が、哲学的人間学的見地からみると、如何なる意義をもつか、つまり、哲学的人間理解に何を寄与しうるか、を確かめる。

無論、この様な研究は、もはや伝記論の外へ出ている。

然し、「一つの伝記論」を書き終えたいま、私はしきりに、その様な研究への内からの誘いを感じている。機会と余力があれば、それに挑戦したいと思っもいる。

然し、さしあたり私がなさねばならぬのは、「一つの伝記論」の完結につづいて、「本来の伝記」を如何にして書くかを考察した「伝記の方法論」を発表することである。